

初撰本霞関集（石野広通撰）の本文

松野陽一

要旨 寛政十一年刊行の再撰本霞関集の本文は、撰者石野広通の自筆稿を版下にした安定性があるものであるのに比し、明和五年成立の初撰本は欠脱の多い写本（孤本）の本文に拠らざるを得ない不安定さに悩まされてきた。しかるに、近時、二伝本が発見され、対校が可能になったので、出来得る限り原本の姿に近づく道を探ってみることにした。

初撰本の霞関集の本文については、従来何度か解説を加えたことがあるが、孤本である慶応本に拠るしかなく、資料性の限界を克服し得ない状態にとどまっていた。ところが、その後、下冊のみの端本ながら比較的欠点が少ないと判定される弘前本が見出され、更に近時、新たに完本が出現して、原本からさほど離れない段階までの遡及に可能性がでてきたので、現段階での判断を示し、大方の批判を得たい。

一、伝本

現在確認できる伝本の書誌の概略は次の如くである。

初撰本（明和五年春序、目録同年冬）

1 慶応義塾図書館蔵写本二冊（88・73）23・5 cm×16・4 cm、墨付一二七丁（序一丁、本文一二六丁、作者目録、歌数記載一〇丁）。每半葉序一一行、本文九行、一首一行書き、詞書三字下り、奥書ナシ、内外題「霞関集」、首部破損、表紙に「□林院様手写」の記載。蔵書印「浦井／蔵本」。渡辺刀水旧蔵本。

○書写者の伝承のある「□林院」が誰かは判然としないが、あるいは、十一代將軍家斉妾のお楽の方（家慶生母。文化七年没。香琳院）か。印記の「浦井」は浦井有国か。本文の性質については後記。略号〈慶〉

2 弘前市立図書館蔵写本一冊（W九一・一五―一〇三）下冊ノミ存。

23・0 cm×17・0 cm、墨付五一丁（本文四三丁、作者目録、奥書八丁）。本文每半葉一三行、一首一行書き、詞書四字下り、奥書「安永九年十月写之 廣澄」「天保三年 好人岡田歌之助」。内外題「霞関集」。印記「佐藤」「緑林園／図書印」、見返し貼紙に「此冊子杉山小藤太所持之処分与せられたる物なり 明治三十四年四月十八日

佐野楽翁」とあり。

○精写本である。安永九年奥書の「広澄」は広通の女を養女とした同族の石野広澄⁽²⁾であろう。寛政重修諸家譜に拠れば、安永八年十一月二十八日に書院番を辞して無役の時に当たっている。岡田歌之助や印記の人物については不詳。新日本古典文学大系『近世歌文集上』(岩波書店 平成八年)に収録した「雑歌」の底本。略号〈弘〉

3 架蔵写本二冊

朽葉色布目紙表紙。23・1 cm×16・3 cm、墨付一二四丁(序一丁、本文一一四丁、作者目録九丁)。序一二行、本文每半葉八行、一首一行書き、詞書二、三字下り。奥書ナシ。内外題「鶏鳴霞関集」。歌数記載ナシ。作者目録末尾注記「右大概をしるす ひがみも侍るべし、明和五年冬書之」に続いて「本間長兼／集」とあり。印記(両冊巻頭葉右下隅。朱丸印)「広保」。

○外題(両冊、打つけ書き)、内題(巻一〜六)いずれも「鶏鳴霞関集」とあるが「鶏鳴」は東国の枕詞「とりがなく」の万葉表記九例のうち三例(一八〇七、三一九四、四〇九四)に拠ったもので、関東(江戸)歌集たることを意識した名称であろう。初撰本、再撰本共に序に「鳥がなくあづまのみやこに」の表現がある。この歌集の初名か。〈慶・弘〉に見える作者目録の作者名肩の注記(入集部立)は無く、巻毎の歌数表記もない。作者目録末尾の「本間長兼」は寛政重修諸家譜に拠れば、大番組頭で、安永九年二月十九日に七五歳で没している。「集」は作者目録の集成作業の意か(この問題は後述する)。印記の「広保」は、同族の石野広保⁽³⁾(明和七年八月御納戸番)か。右の諸徴証は〈慶・弘〉より先行することを示すものか。伊藤敬氏旧蔵。略号〈鶏〉

○以上三本は撰者石野広通の近縁者による写本と推測される。〈慶〉本は確証はないが、表紙注記の「□林院様手写」は、幕府和歌圈内での書写たることを推測させる。〈弘〉は書院番である広通女の養父広澄が安永九年とい

う成立に近い時点での書写という近接性が注目され、〈鶏〉もまた、広澄とほぼ同世代の同族石野広保の手沢本であることが見逃せない。初撰本は比較的狭い範囲でだけ書写され流布もそう広いものとはならなかったのであろう。

再撰本（寛政十年冬序、同十一年秋刊）

蹄溪蔵版・如是縁斎蔵版二冊本。料紙紙型は大本、半紙本の二種あるが、版型は同一である。序三丁、本文一六二丁、刊記一丁、作者目録二〇丁。序・本文共無辺、每半葉九行。識語・刊記の丁のみ四辺匡郭（14・3 cm × 7・3 cm）で八行。本文版下は広通自筆、序三丁は佐々木万彦書、作者目録は辻知篤書という。蹄溪・是縁斎は広通の号だが識語は広通男の萬斎佐々木万彦⁴が記しており、実務は万彦による私家版と言つてよいであらう。

○再撰本系統の写本の伝本も数点存在するが管見の及んだ限り、全て右の万彦の刊行に関する識語を記しており、刊本を書写したものである。刊本の前段階の草稿本は未だ確認できない。古典文庫本（昭和五七年刊）、新編国歌大観本（昭和六三年刊）の底本は共にこの寛政十一年刊本である。略号〈再〉

○再撰本は序に言うように宝永から寛政に至る百年間の百八十八人（作者目録）の千二百二十六首（回文歌逆読み二首を歌数に含まない）を寛政十一年に刊行した歌集である。これに対し、初撰本は三十年前の明和五年に、享保から明和に至る五十年間の百三十四人（初撰本作者目録注記）の千四十七首（巻末歌数表記）を収録して編纂した歌集であった。

概要は右の通りなのであるが、初撰本の作者数、歌数は、各伝本末尾の表記に拠ったものである。果して実態はどうか、本文異同の吟味を基にして、次にその点を確認しておきたい。

二、巻末部立別歌数表記

右の三伝本は共に、歌本文に続いて「作者目録」が記載されている。その末尾には都合百三十四人

とあって、更に「右大概をしるす、ひがみも侍るべし、明和五年冬書之」と付注されている。〈慶・鶏〉の広通自序には「明和五年春」とあるから、この目録も同年中に広通が記したものと考えてきた。ところが〈鶏〉には続いて「本間長兼集」と同筆で五字の加筆がある。とすると目録作成者は広通ではなく、長兼なのであろうか。長兼は霞関集に二首入集の歌人で、目録には「武者小路家門人、当時大御番組頭、本間九八郎」とあり、寛政重修諸家譜によれば、この年六十三歳と知られる。広通はこの年五十一歳、御納戸頭であるから、や、先輩歌人の長兼が助力作成しても、かならずしも不自然ではないが、やはり目録本体の最終作成者は広通であり、長兼は〈慶・弘〉に見られ〈鶏〉はないのが問題だが、作者毎の「六巻共二入」「春、恋二入」等の小字注記の如き、作者別カード作成、整理といった基礎的な仕事の引き受けをやったのではあるまいか。というのは、再撰本でも目録末尾に「右百八十八人」と歌人数が記された上で、広通自身による「此百八十余人の内……」という注記が存しているからである。初撰本に遡っても、広通自身が同じ作業をしていた蓋然性は高いと考えておく。

かように記述者を問題にするのは、本節の中心である部立別歌数の表記者に関係するからで、これも広通自身か、それに近い人物による表記で初撰本の原本かそれに近い本文に拠る計数と見做せれば、現存各伝本との距離を測定する有力な根拠になってくるからである。

さて〈弘・慶〉によれば部立別歌数は次の如く表記されている。

春百八十一首 夏百二十三首

秋百八十首 冬百二十三首

恋百五十二首 雑二百八十八首（傍線部〈慶〉ナシ）

そして雑の低位分類として雑の脚部に

雑百六十八首 旅二十七首

哀傷二十四首 釈教十六首

神祇三十一首 雑体二十二首

長歌二、六句一 折句五

物名六 廻文八

という記載がある。長歌以下は雑体の低位分類の内訳である。そして最後に、

総計千四十七首（慶）は千四百七首）

となつている。即ち、初撰本の、歌数を計算した段階の本文は総歌数千四十七首を収録したものであり、部立別歌数の総計と合致して矛盾がないことを示すことを確認しておきたい。

それではこの歌数と現存三伝本の本文はどの程度の差があるものかを吟味することとする。

なお、各部立の本文との異同を検証する前に、右の歌数全体に係わる数え方を二点検討しておきたい。それは雑歌二八八首（雑体二二首）とする数字のうち、長歌二首、回文歌八首とすることの内容についてである。

長歌は〈鶏・弘・慶〉共に、仁木省二の享保十五年八日の離京に際しての冷泉家への挨拶

1205 しきしまの道の教へは……………（長歌）

1206 むさしの、（反歌）

と、石野広通の明和三年、妻子の冷泉家入門についての謝歌

1207 言の葉の栄はいとと……………（長歌）

1208 君が門（反歌）

から成っている。近年の活字版歌集で歌番号を付す場合は、検索の都合から、長歌、反歌を各独立した歌と見做して、右の場合なら四首ということになるのが一般（新編国歌大観・古典文庫・新古典大系もそのように付した）だが、この歌数表記では、長歌と反歌一組で一首と数えているわけである。

次いで回文数は八首とあるが、最後の二首が問題である。即ち、六首は通常的回文歌（下から文字を辿ると上からと同文歌となる）であるが、この二首は詞書に、

かへしてよむに、おなじからぬ回文（鶏）

とあるように、上からと下からが別歌に仕立てられていて、計算の仕方では二首二組み、計四首となるからである。

第一首の知清歌は

ながるだに浪と岸にも名はたつたはなとひよるもとがめんやきみ（上からの訓み）

見きやむめ門洩る宵と名は立田花も錦とみな似たるかな（下からの訓み）

となっていて、贈答歌に読みとれる仕立てである。⁽⁵⁾

第二首の広通歌は

友のきつのぞむそのかたよそとてもはなのもとやと駒のけさむく（上からの訓み）

再	弘	慶	鶏	表記	
203		180	181	181	春
152		122	122	123	夏
201		180	180	180	秋
135		119	122	123	冬
202	152	150	150	152	恋
333	288	285	283	288	雑
197	168	165	165	168	雑
36	27	27	27	27	旅
21	24	24	24	24	哀
21	16	16	16	16	釈
36	31	31	30	31	神
22	22	22	21	22	雑体
2	2	2	2	2	長
1	1	1	1	1	六
5	5	5	5	5	折
6	6	6	6	6	物
8	8	8	7	8	同
1226	440	1036	1038	1047	計

(1) 歌人・歌数表記

汲む酒のまことや友の名はもてどそよ高望むその月のもと（下からの訓み）
 となつて、前歌が観桜、後歌が観月の交友歌として、対照、連関の内容で仕立てられている。⁽⁶⁾従つて、上下は、所詮無理な作品ではあるが、一応対等の歌なので、各二首計四首と見做す可能性はある。しかし、これを巻末部立別歌数では二首としているのである。従つて本稿では、以下この数え方に従い、長歌二首、回文歌八首として扱うこととする。

さて、右の巻末歌数表記を基とし、それに合わせて各伝本の歌数を整理してみると次表の如くなる。各伝本の書写状況は区々であり、本文異同上の問題点はその先きで吟味を加えることとする。

これによって大観すれば、「歌数表記」と本文の差はさほど大きくないことが知られよう。これを具体的に本文の状況を検討すれば更にその近さを認めることができる。

(2) 歌本文の有無

	再	弘	慶	鶏	番号	部立
詞	○		△	○	136	春
	○		×	○	141	
詞	○		○	×	222	夏
	○		○	△	237	
	○		×	○	282	
詞	×		△	○	482	秋
	○		×	○	508	冬
	○		○	×	550	
	○		×	○	605	
	○		×	○	606	
	○		×	○	607	
詞	○	○	△	○	632	恋
詞	○	○	×	○	673	
	○	○	○	△	692	
	○	○	○	×	700	
詞 作	○	○	×	○	789	雑
	○	○	×	○	793	
	○	○	○	△	801	
	○	○	×	○	805	
	×	○	○	△	923	
	○	○	○	×	926	
	○	○	○	×	999	
	×	○	○	×	1042	

*○●歌有。 ×●歌無。 △●詞書や作者表記有、歌無。

右は歌本文の有無に關してのみの異同一覽である。以下、(1)(2)表を合せて、部立毎に本文の吟味を加えて行きたい。

〔春〕

〔鶏〕と〔慶〕には二首136 141の本文異同がある。

① 春〔鶏〕アリ、〔慶〕線内ナシ

夜思花

三位尼公

136 明ぬまにちりもやせむと思ひつつぬればや花の夢にみゆらむ
 花見に行て 知清

137 あすはまたたがとひよらむ袖のうへにちるべき為と花や残れる

② 春〈慶〉アリ、〈慶〉ナシ

落花 直秀

141 咲きしよりまがひし花のちりてこそいとゞ桜は雪とみへけり

①は〈慶〉では136題の「夜思花」と作者表記「三位尼公」の一行が137歌「あすはまた」の題・作者の如く連続して表記されているが〈鶏〉に拠ればこの間の二行、136歌「明ぬまに」、137詞書・作者が脱落しているのであって、本来は〈鶏〉の本文が原型であったことが知られる（〈再〉にもこの二首の型で採録されている）。

②は、〈慶〉では140・142が連続していて、脱落に気づかないが、〈鶏〉には141が存在しており（再ニモアリ）、有る方が原型であったと推定される。即ち、(1)表の歌数181首は、〈鶏〉の形の本文に拠ったと考えられる。

なお、〈慶〉の春部には、親本以前に生じた錯間がそれと気付かず書写されているので

a		c		b		d
……106		……120		……107		……120
……131		……131		……107		……120
……131		……131		……107		……120
……131		……131		……107		……120

(原型 a b c d)

注意する必要がある。

〔夏〕

ここでは三首222 237 282の本文異同がある。

③ 夏〈慶〉アリ、〈鶏〉ナシ

(北林尼公阿仏手向に忠篤す、めける ほと、ぎす) 広武

222 ほと、ぎすけふ待つけて年毎に手向かはらぬ音にや鳴らん

④ 夏〈慶〉アリ、〈鶏〉線内ナシ

対橘問昔 (幸隆)

237 いとけなき袖につ、みし昔こそ花橘にとはまほしけれ

閑庭橘 丹波守政武

238 昔にはかはる蓬か軒端にもふりせず匂ふ風のたち花

⑤ 夏〈鶏〉アリ、〈慶〉ナシ

遠夕立 幸隆

282 近江路や夕立すらし相坂の関のこなたもくもる斗に

春部とは逆に、〈鶏〉の方に書写のミスがうかがわれる例である。③は、〈鶏〉は「北林尼公阿仏手向に忠篤す、めける ほと、ぎす」の詞書に「大和守頼由」の221「夜の雨ふりし昔を忍び音に鳴て過行山郭公」の一首しか記さないが、〈慶〉では同じ詞書を受ける広武の222「ほと、ぎすけふ待つけて」の二首目が続いている(〈再〉も同じ)のである。この場合、有無のいずれが原型かは判断できないが、脱落の可能性も充分あり得ることである。

④は、①の逆のケエスである。「対橋問昔」題は、238政武歌でも通らなくはないが、237幸隆歌の内容に適う。〈慶〉が原型本文であろう（〈再〉も連続配列ではないが両歌を収録）。⑤は、〈慶〉が、広通の283「小車の音かときけばなる神の空にとゞろく里の遠方」をこの282の「遠夕立」題ではなく280 281の「夕立」題で配置している点が問題である。三首を「夕立」題で括弧することは当然可能な措置だからであるが、〈再〉で282幸隆歌が在り、283広通歌が削除されたことを併せ考えると、〈慶〉の282歌の単純な脱落と考えるのが最も妥当な判断かと思われる。これでも巻末歌数表記よりは一首足りないわけである。

〔秋〕

⑥ 秋〈鶏〉アリ、〈慶〉線内ナシ

直秀家にて秋木といふことを（知清）

482一はよりつけてし秋の日数へてちり残る桐の梢淋しき

〈慶〉には詞書は表記されているので歌の脱落は、一丁最終行（九行書き）で詞書が終ったため、歌本文の見落しをしてしまった単純な過誤といつてよからう。

〔冬〕

⑦ 冬〈鶏〉アリ、〈慶〉ナシ

（残菊）

佳孝

508冬かけて霜にくだけぬむらさきの一本残る菊はめづらし

⑧ 冬〈慶〉アリ、〈鶏〉線内ナシ

雪中残雁

源高門

549 友に今おかれて雁や

こしのねの雪を翅にさそふ寒けさ

雪中鳥

源昌名

550 ひろふべき落ほも今はなが岡の田づらの雪(に) 雁や侘らん

⑨ 冬〈鶏〉アリ、〈慶〉ナシ

除夜

高門

605 四方に今なやらふ声はしづまりて年を尋る夜半の灯

幸隆

606 身につもる老になやらふわざもがな目に見ぬ鬼はさもあらばあれ

広通

607 いづくにもあすの春まついそぎしてねぬ夜や年の余波成むと

⑦は残菊題、506信遍、507忠篤と〈鶏〉は三首一連の最後の歌である。〈再〉も同様であることから、一応、〈鶏〉が原型、〈慶〉は単純な脱落と考えたい。

⑧はやや問題がある。〈鶏〉〈慶〉のみの対比ならば右の表示の如く、549高門歌の下句から550昌名歌の歌本文まで

〈鶉〉の単純な脱落と判断したいところであるが、〈再〉では昌名歌と高門歌の歌順が入れ違っている上、〈鶉〉では51の作者表記（〈慶〉では信遍とする）が欠けているのが、〈再〉では「道筑」と有るからである（成嶋信遍は冷泉門の有力歌人。作者表記は初撰本21首は全て信遍〈慶〉、再撰本28首は全て道筑である）。即ち、〈鶉〉の、高門、信遍の歌順がそのまま〈再〉に継承された可能性もあるとすれば、或いは昌名歌が、〈鶉〉の親本に在ったとしても、その位置は、高門・昌名・信遍ではなく、昌名・高門・信遍であったかもしれないからである。書写原因以外の編集上の動機などはこの際導入しないでおくが、存疑の個所として今後新伝本の出現を俟ちたい。今の段階では表示の如く処置しておくこととする。

⑨は冬部卷末三首歌群で、これを欠く〈慶〉の卷末は604広通の歳暮題歌なので、この歌で冬部が終っても少しも不自然ではない。それが原型で「除夜」歌群は附加されたものと考えられなくもないが、〈再〉に存在することを考慮して、一応、〈鶉〉が原型、〈慶〉は欠脱と考える。歌数表記との関係でも同様の結論となる。

以上、四季部に関していうと、〈鶉〉と〈慶〉のいずれを先の姿を残すと考えるかという点ではもつと多くの徴証への目配りを必要とするが、少くとも卷末表記歌数に近いのは、〈鶉〉の復元本文の方であり、春秋一八一—一八〇首、夏冬一二三首という歌数の対応性からも、一応〈鶉〉本文を重視すること、〈弘〉〈慶〉の卷末歌数表記は〈鶉〉本文との対校で想定される祖本に拠ってカウントされたものであることに注目しておきたい。

〔恋〕

恋・雑部は〈弘〉が加わり、三本が対校できる。

⑩ 恋〈鶉・弘〉アリ、〈慶〉線内ナシ。タダシ題、作者名後入

聞声恋

勝敏

632 わりなしや枕尋ぬる物こしの声もまちかきみすの隔ては

見恋

連阿法師

633 しらせばやそれと見えつる中垣のゆるさぬ道もこえまほしきを

⑪ 恋〈鶏・弘〉アリ、〈慶〉ナシ

寄鷹恋

尚之

673 いつまでか人のつらさはあし鷹のわが手になれぬ心見すらん

⑫ 恋〈弘・慶〉アリ。〈鶏〉線内ナシ。

寄燈恋

源たか、ど

692 ともし火のうき影ばかり身にそひてこぬ人つらき闇の夜深さ

恋燈

美作守直秀

693 忍びつつ人をしづめてかく文にきへなんとする灯もうし

⑬ 恋〈慶・弘〉アリ、〈鶏〉ナシ

寄枕恋

中原広温

700 諸ともにもらさじとするむつごとはまくら斗りの知もわりなき

⑩は、〈慶〉の単純な脱落と解してよいであろう。題・作者名の小字書入れが本文と同筆であることも、書写の誤りを後で気付いた故と思われる。

⑪も〈弘・鶏、再も〉の本文の前後は安定しており、〈慶〉のケアレスマスと見做してよからう。

⑫⑬は〈弘・慶〉の本文が原型で、〈鶏〉の単純な書き落として考えられる。

結局、恋部は〈弘〉が最も安定している本文ということになる。即ち、巻末歌数表記通り、一五二首の実数の本文が確認できるわけである。

〔雑〕

⑭ 雑〈鶏・弘〉アリ、〈慶〉ナシ

仙家 安卿

789 仙人の岩ほの戸ほそ雲晴れてみどりの空に遊ぶ白鶴

⑮ 雑〈鶏・弘〉アリ、〈慶〉ナシ

〔閑居〕 隆任

793 もとめなき心ぞやすきかくて世に杉生の窓の明くれの空

⑯ 雑 〈慶・弘〉アリ、〈鶏〉線内ナシ

古寺にて 師道

801 鐘のねにたぐへてきくもしづけきは塵の外なる庭の松風

古寺の松 平知清

802 松風の音にもこゝろすみ染の夕さびしき山のふるてら

⑰ 雑〈鶏・弘〉アリ、〈慶〉ナシ

（古寺鐘）

兼隆

805 法の水絶せぬ三井のふる寺に朝夕かねの声ひびくらし

⑱ 雑〈慶・弘〉アリ、〈鶏〉線内ナシ

（寄国祝）

正隆

923 いく千里民のとゞまる所得てみやこしめたる国の久しき

⑲ 雑〈慶・弘〉アリ、〈鶏〉ナシ

（寄民祝）

広通

926 あらそはで貢や運ぶおのが（どち）畔をばゆづる民のこゝろに

⑳ 雑〈慶・弘〉アリ、〈鶏〉ナシ

日光百五十廻の神忌に東叡の宮居にまうで拝ける

ひろ通

999 てらせ猶百五十とせのめぐる日のひかりそひ行神のみづかき

㉑ 雑・回文〈慶・弘〉アリ、〈鶏・再〉ナシ

1042 もとめつ、川ぎしわたしとひぬれぬひとしたわしきわがつ、めども

追考 わかつ、めどもわの字かな相違 可除之。

右の内、⑭⑮⑰は〈慶〉の欠脱、⑯⑱は〈鶏〉の欠脱として処理してよいかと思われる。問題は⑲⑳㉑の、〈慶・弘〉に有って、〈鶏〉に欠けている三首についての判断である。

次節で検討するように、かならずしも〈鶏〉の単純な欠脱とは考えられないからであるが、例の巻末歌数表記の、雑二八八首（雑一六八〈神祇三一、雑体二二〈回文八〉〉）を完全に満足させるのは〈弘〉の本文ということになる。即ち、四季部では〈鶏〉と〈慶〉の対校によって復元される本文、恋、雑部では〈弘〉の本文が、巻末歌数表記に合致するというわけである。無論、ここまでの吟味は数字の一致まで到達したに過ぎない。しかし、現在失われてしまっている〈弘〉の上巻四季部の部分の本文の姿が、右に見たように〈鶏〉と〈慶〉の対校によって復元本文からさほど離れていないという見当だけはこれでつけられたと云ってよいであろう。

三、〈弘・慶〉本文と〈鶏〉本文

さて、前節の作業は三伝本が同一系統の本文と仮定しての巻末表記歌数を確認したに過ぎない。各伝本の本文の差は、もう少し精密に測定しておかねばならぬであろう。二の結果は、次の二つのレヴェルに整理できよう。

I どちらかの本文が単純な書写ミスで異同が生じているもの。

①④⑥⑩⑪⑫⑭⑮⑯⑰⑱の11例

II 書写ミスか、編集意図による歌の欠脱かは判別つかないが、巻末表記歌数に徴して、〈弘〉の完本には存したと推定されるもの、

②③⑤⑦⑧⑨⑬⑱⑳㉑の10例

⑧⑨⑱⑳㉑

即ち、Iはほとんど問題はないが、IIでは〈再〉の徴証をも援用すると、特に

の五例は問題を含んでいる個所かと考える。以下、三伝本間（更に〈再〉をも併せる）の対校の中で検討してみたい。第一には〈弘〉と〈慶〉の関係である。〈弘〉は上冊を欠くので厳密には対比し難いが、恋・雑部の歌本文、作者目録の本文の性質、歌数表記の備わる点など、〈慶〉にやや書写態度に厳密さを欠く点はあるが、ほぼ共通する要素が濃く、同系統本であるといつてよいかと思われる。即ち、恋・雑部本文では、700・926・999・1042の有無、919・920の歌順異同、（後記）を初めとする諸点に、作者目録では

〈鶏〉〈再モ略同ジ〉

源氏英 小十人与頭 古川武兵衛

英長 冷泉家門人 御数奇屋頭 白沢林葛

とあるべきところを、〈弘・慶〉共に、

源氏英 冷泉家門人 御数奇屋頭 白沢林葛

と誤まり、氏英と次の海松子の行間に△を注して、脚部に

春冬雜二人
△英長 冷泉家門人 御数奇屋頭 白沢林葛

と書入れ（慶）ハ「冷泉……」の注記ナシ）をしている点、歌数表記が、（慶）には脱文や合計歌数に誤まりがあるものの）共に存在する（鶏）にはナイ）点などの徴証から大略同系統本と見做すことができる。

無論、小さな異同は少なからず、特に〈慶〉の四季部は〈弘〉に欠けていて対校不可能なので不安は残るが、最も

異同の激しい⑨の冬部卷末三首の欠脱（前記参照）も卷末歌数を根拠とすれば（この三首が無いと冬部は一二三首にならない）、〈弘・慶〉の想定祖本文には存在したと考えられ、共通する本文と考えておく。特に作者目録では〈慶〉に、

證道上人に「大徳の人也」

信遍に「徂徠門人」

などの、〈鷄・弘・再〉にない独自異文の加筆が目立つという特徴が認められるが、全体としては同系統本として扱えるであろう。

そこで、やつと第二の〈弘・慶〉と〈鷄〉の対比に入る。

まず注目されるのは、⑩の事例である。回文八首の中の第一首で、前引の如く、〈弘・慶〉では、

宮部義正

もとめつ、河ぎしわたしとびぬれぬひとしたはしきわがつ、めども

追考、「わがつ、めども」、「わ」の字かな相違。可除之。

とあって、左注に指摘するように、第五句の「わが」は逆訓みでは「かわ」となって、「河岸」の「かは」にはならないというわけである。これは撰者広通の注と見るべきだが「可除之」とあることによつてか、〈鷄〉と〈再〉ではこの歌を欠き、回文歌の収録数は七首（〈再〉は別に伴資善「ながれくる」の一首が加えられて八首）となるのである。〈再〉の場合はこの左注を承けた措置と見做してよからうが、〈鷄〉も同じ措置による現象と考えてよいのであるか。そうとすれば、〈弘・慶〉は〈鷄〉に先行する本文ということになる。ところが成立順を逆に考えた方がよい例が幾つか存在するのである。

即ち、選者広通の歌の異同(19)(20)などに次の例証がある。

⑱ 初撰本(弘)

再撰本

母の六十賀、為泰卿より題を給はりて、人々によませ侍る、松久友
中原広通

919 友として六十の老の数そへとかきつむ千代の松の言の葉

松延齡友
源頼載

921 契をけ榮行宿の松がえに猶末遠きちよのよはひを

松延齡友
源頼載

契りおけ榮行く宿の松がえに猶末とほきちよのよはひを
母七十賀為泰卿、鶴契齡といふ題を給はりて、老いら
くをつまんよはひは鶴のこの榮をためし千代よばふ声、
とよみてたげれば

遠江守広通

920 高門六十賀に、鶴契週年
源しげ澄

此宿に六十はあかぬよはひとてよろづ世ちぎる庭の友つる

寄国祝
源隆任

922 皇の代、つぎませる道ぞげに他の国にはたぐひしもなき

正隆

923 いく千里民のとゞまる所得て都しめたる国のひさしさ

〇八四 つるの子の千年をよばふ声も老の齡の数や添ふらむ

高門六十賀に、鶴契週年
源しげ澄

〇八六 此宿の六十はあかぬよはひとてよろづ代契る庭の友つる

寄国祝
源隆任

〇八六 皇の代代つぎませる国ぞげに他の国にはたぐひしもなき

924 月震の名におふ国も日の本の代、の光をあふがざらめや
中原広通

寄民祝

源高門

925 みてもしれ民の竈の煙までゆたかなる世になびく心を

寄民祝

源高門

926 あらそはで貢や運ぶをのがどち畔をばゆる民のこゝろに
中原広通

祝

中原広明

祝言

よみ人しらず

927 国栄民安かれとおさめしる御代の恵をあふぐかしこさ

○八九世にひろき神の恵に取りそへて仏の法も国まもるらし
○九〇国栄え民安き代とをさめしる君がめぐみをあふぐかしこさ
よみ人しらず

②〇 初撰本（弘）

神祇歌

伊勢

大和守利啓

神祇歌

再撰本

神祇

平高潔神学 白川家門人

995 天てらす光を添て代を守るめぐみへだてぬいせの神垣
松 逕

○六九五十鈴川下つ岩根の神風やうごかぬ代代に吹伝ふらし

996 世、たえず猶守ます神路山玉ぐしのはの色もかはらで
連阿法師

○七〇おこたらずはこぶ心は神路やましめの外なる身ともへだつな

997 をこたらずはこぶ心は神路山しめの外なる身ともへだつな
松 逕

○七〇世たえず猶守ります神路やま玉ぐしの葉の色もかはらで

美作守直秀

伊勢

大和守利啓

998 末の世といふべくもなし神かせやみもすそ河の清きながれは

天てらす光をそへて代を守るめぐみへだてぬ伊勢の神垣

日光百五十廻の神忌に、東叡山の宮ぬにまうでて拝

日光山にて百五十廻の神忌に東叡山の宮ぬにまうでて

み奉る

拝み奉りし時

遠江守広通

中原広通

999 てらせ猶百五十年のめぐる日の光添行神のみづがき

てらせ猶百五十年にめぐる日の光添へゆく神のみづがき

安永五年、日光御社参供奉に旅立ちける時よめる

おなじ人

石清水

淡路守氏房

石清水

淡路守氏房

1000 ながれての末もたのもし石清水濁らぬ御代は神に任せて

ながれての末もたのもししいは清水濁らぬ御代は神に任せて

八幡宮法楽に

源 高 門

八幡宮法楽に

源 高 門

1001 たのもしなわが人をこそ石清水流ての代に守るちかひは

たのもしなわが人をこそい清水流れての代に守るちかひは

右の①926「あらそはで」は〈鶏〉無、〈弘〉有、②999「てらせ猶」も〈鶏〉無、〈弘〉有のケエスで、共

に〈鶴〉の単純な誤脱とも考えられるが、①歌群でいえば、初撰本919「友として」の母六十賀の折の歌が、再撰本では104「つるの子の」の母七十賀の折の歌に差し替えられ、初撰本924「月震の」が再撰本では削除されて、「寄民祝」題が簡潔化されている例、②歌群でいえば、問題の999「てらせ猶」の家康百五十回忌の歌に、再撰本では114「旅衣」の日光社参供奉の歌が添えられ、関東神社歌の補強が試みられるなど、いずれも撰者自詠歌を用いての編纂上の工夫

が看とれるわけで、①926、②999も単純な欠脱ではなく、編纂上の理由による異同の可能性があると見てよからう。そうであるとするなら、〈鶏〉が先行し、〈弘〉の形に増補され、そのまま〈再〉に継承されたと想定できる。

そうすると例えば、長歌「帰雁」の、

よみひとしらす

85天地のうちはかはらぬ春ぞともしらでこし路に雁や行蘭（鶏）
の左注は

〈鶏〉ある人のいわく、是は念祥院実観といえる人の歌のよし

〈慶〉ある人のいわく、是は念祥院実観といへるか歌なり

〈再〉ある人のいわく、是は念祥院実観といへるかうたなり

の如き小異同があるが、この「いえる人の歌のよし」「いへるか歌なり」程度の異文は、厳密でない書写態度の伝本間ではしばしば生ずる現象ではあるものの、この場合は、①920の例同様、〈鶏〉対〈弘・再〉の関係の反映の徴証と考えてよいかと思われる。

歌順の異同の例もあげておこう。〈再〉春部

路苗代 源 高 門

一八六 賤の男が行きかふあぜの道みせてしめ引きのこす小田の苗代

躑躅 美作守直秀

一八七 霞はれ夕日くまなき丘谷にさけるつつじの色ぞかかやく

仙台中将山荘の躑躅のさかりに、当座の歌よませられ侍るに、岡躑躅といふ題を探り得て侍る、をりしも庭に

きぎすのあさりければ

遠江守広通

一八八 きぎす啼く岡べのつつし妻恋のおもひの色を見せて咲くらし

水辺躑躅

備前守忠精朝臣

一九九 岩つつじ咲きそふ頃は秋ならでくれなみくくる山川の水

杜若

源重澄

二〇〇 かきつばた水行く川の橋の名のやつれぬ色に今も咲くらし

款冬

連阿法師

二〇一 たれとへどいはぬ色さへ隠家のこころにかなふ山ぶきの花

敬蓮

二〇二 袖ぬれてさのみは人のをらじとや露もおくらん花の山吹

折款冬

公幹深谷

二〇三 ちらさじと折りぞわづらふ垣ねより咲きこぼれたる露の山ぶき

松藤

左中将吉村朝臣

二〇四 咲越えて松のときはの色も見ずこき紫の藤のしなひに

右の歌群のうち188「きぎす鳴く」189「岩つつじ」は〈再〉で入集した歌で、初撰本には入っていない。ここが〈慶〉では「霞はれ」に「杜若」が続いて、その前後は〈再〉と全く同じ歌順なのである。ところが〈鶏〉では

賤の男が (路苗代 高門)

霞はれ (躑躅 直秀)

たれといへば (款冬 連阿)

袖ぬれて () 敬蓮)

ちらさじと (折款冬 公幹)

○かきつばた (杜若 重澄)

咲越て (松藤 吉村)

の歌順になつていて、重澄の「かきつばた」は、公幹の「ちらさじと」と吉村の「咲越て」の間に位置しているのである。これも稀なケエスとしては書写上の単純なミスという可能性もあろう。しかし、配列上の見地からすれば、これは「杜若」歌をどこに位置づけるかという問題から生じた異同かと思われる。即ち、「杜若」を「款冬」の後へ置くか前に配置するかという問題である（実は前後歌の措辞〈咲く〉〈色〉の連関への配慮があるが、省略する）。〈鶏〉も〈慶〉も配列上それぞれに安定しており、〈再〉は〈慶〉に「躑躅」を強化する形で詰めこんだと解釈される。こゝでも〈鶏〉対〈弘・慶・再〉の関係が看取れるというわけである。

〈再〉の版下を広通が自書している（佐々木万彦識語）ことから、〈弘〉と〈再〉の同質性の強い部分では、他の伝本の異文はその異質性を重視する必要があるらう。

以上、⑧⑨（前節の如く処理）⑩⑪⑫や85左注、「杜若」歌の歌順等の異文吟味からすると、〈鶏〉と〈弘・慶〉は近似しながらも、明らかに共通ならざる本文要素を含んでおり、書名の「鶏鳴」の有無をも配慮すれば、⑫の徴証を除くと、〈鶏〉が先行した可能性が強いということだけは言い得よう。そして、前節に吟味した「卷末歌数表記」は、〈鶏〉よりも、精撰された〈弘・慶〉の祖本に拠った歌数であつたらうと推測しておく。

右の異同の觀察から見て、〈鶉〉は〈弘・慶〉に先行する要素は含むものの、直接の祖系には位置づけられないことは明らかで、それでいて、骨格には大きな差異はないといわなければならない。ということは、書名に「鶉鳴」を冠する（各部立名から作者目録に至るまで一貫して冠している）分、〈鶉〉の祖本はやはり本歌集の第一段階を示す本文を有つのであり、〈弘・慶〉の祖本はそれに小さな撰定が加えられて「初撰本」霞関集」として成立したのであろう。両者の差は、原撰本・精撰本と呼ぶほど大きくはない。そして両本ともそれぞれの原本からさほど離れた本文ではない。そのことは共通する要素が極めて大きいことによつて証することができよう。弘前本の巻末歌数表記は、大略、撰者石野広通筆の原本「初撰本」霞関集』の本文に拠つたと見てよいのではなからうか。

四、初撰本から再撰本へ

明和五年春の初撰本成立（目録は同年冬）から三十年を経て、寛政十年再撰本が編まれ、翌年私家版として刊行された。初撰本は、享保（二七一六―三六）から明和五年（一七六八）にかけての約五十年間の、一三四人の一〇四七首を収録したもの。一方、再撰本は、宝永（一七〇四―一一）を上限とする百年間の、一八八人の一二二八首を収め、一一一人、九六六首が共通している。この間の両本の基本的性格については既に前稿に述べたところ——古学派排除の一貫性、江戸冷泉流中心から、関東堂上流全体への撰歌範囲の拡大といった諸点——を要する必要があると思われ、厳密な意味での本文の性格の差は、今後の初撰本の校本作成を俟って行われねばならない。前節に引いた僅かな例示からも推察されるように、配列上の変化の工夫は随処に見ることができ、文芸上の深化の妙、近世関東武家の文芸意識を汲むことができるからである。また同一歌の措辞の異同といった点にも及ぶ問題すらある。次の例は撰者

広通自身の歌で改作し易かったケエスでもあるが、比叡回峰千日満行者であった東叡山等覚院法珍の歌会の「紅葉」題歌は

千度まで時雨に峯をめぐりてや紅葉色そふ山寺の秋（鶏）

峰高みしぐれもちたびめぐりてや紅葉色そふ山寺の秋（再）

の如き改筆の跡を示すのである。この歌、天明八年の広通自撰家集『五百四十首』では（鶏）の本文であるから、再撰本に至つての改作と思われるが、表現の改稿は当然配列に及ぶ問題を惹起する。当然改稿前の初撰本本文での配列吟味も必要となつてくるのである。校本提供の早からんことを期したい。初撰本から再撰本への移行の意義はその後に論じることとしたい。

最後に、前稿では欠脱が多くて意味不明の個所が多かつた初撰本序文を（鶏）によつて、また、再撰本への移行に先んじて、序を伊達藩の歌学者にして儒学者の畑中盛雄（多冲）に依頼した事実が判明したので、結果としては採用されなかつた幻の序文を畑中盛雄家集から、そして参照の便のために再撰本の広通自序を翻刻しておく。また、『鶏鳴霞関集』の巻頭、巻末写真を掲出しておく。

序

初撰本（鶏）

むさしの、広き御めぐみ四方にあまねく、かすみがせきの戸ざ、ぬ御代にあひて、鳥がなくあづまのみやこに、花をめで月をながめ時鳥をまち雪をあつめ、ふかき情をいもとせの中におもひしを、ひなのながぢをはるかにたどり、仏をたうとび神をあがめ、思ひをのべ、代をいはふことぐさおほかめれど、享保の比より明和の今に至るまでいと

せ斗があひだ、その名きこえたる人々、あるは世にしらるべききはあらねど、みちに心ざしあさからぬともがら、かつはちかく馴れむつび侍るがよめる歌ども、草のはつかにひろひ置侍りしをかきつらぬるまゝに、ちうた六とぢになりぬ。人を撰び歌を撰ぶはかけて思ひよるべきにあらねば、よしあしをわかち、名たかきをかならずのするにもあらず。歌の数も又しかり。おほくきくはおほく、すくなくきけるはすくなし。人によりてのことにはあらず。さはあれども、官家による所のさだかにしらねば、名ありといへどもこれをのぞき、公家直門弟にあらねど、そのすぢあるを事にしたがひてこれを入侍りぬ。またたよりなくて、さるべき人共、名も歌もきかで過したるも侍りぬ。とまれかくまれ、うちぎ、にまかせて侍れば、うらみを残して篇を終るたぐひにもあらず。たゞみずからのまくらごと、なすばかりに、明和いつ、のとしの春、水みてる大沢のほとりにつるの髪みだれて糸をなすおきなこれをしるす。

再撰本

むさし野の広き御めぐみあまねく、かすみが関の戸ざ、ぬおりにあひて、久かたの空ののどけさをあふぎ、とりが鳴くあづまの都に、花より花の陰にくらし、やまの端しらぬ月のふくるをたどり、おもひねのほと、ぎすをき、年のなごりを雪におぼえ、硯の石の中のおもひを松の煙によせ、国荣民安きめぐみをかしこみ、かりねのやどにふるさとをしのび、は、きゞのふせやをこひ、千々の蓮の露をたのみ、いのるねがひもみてぐらにとりそへ、さならぬくさぐさのすがた言の葉、宝水の頃より今に至るまでも、とせばかりがあひだ、其名こ、にきこえたる人々、あるは世にしらるべききはあらねど、道にこゝろざしあさからぬともがら、かつはちかく馴れむつび侍るがよめるを書つらねて、ちうたふたも、歌あまりになりぬ。人を撰、歌を撰ぶはかけて思ひよるべくもあらねば、よしあしをわかち、名あるをかならずのするにもあらず。歌の数もしかりなり。おほくきくはおほく、すくなくきけるはすくなし。よしなしぐ

さのしげきをばかり捨待るもなきにしもあらず。すべて官家による所のさだかにしらぬをば、名ありといへどもこれをのぞく。堂上の門弟にあらねど、そのすぢあるをばことに随ひてこれを載侍りぬ。又は、重代の人は初心といへども書のせ侍りぬるもあり。たよりなくてさるべき人の名も歌もきかで過したるもあまた侍るべく、たまたま相見て疎遠の人の歌は書とゞめぬもあり。おさおさうちぎ、にまかせ書つゞり侍るなり。落葉微風をまちておつ。風のちからすくなしといへども、折にふれて言のはどものちりあつまれるにや。みそとせあまり過にし春、明和いつ、のとしの比、かすみが関ちかき水みてる沢辺のおきななかきよせしものありしに、そのおきな世に猶ながらへて、寛政と、せの秋をかぞへ、ふゆ三谷の松蔭にふた、びあらためしるすになんありけるといへり。

畑中盛雄詠草（宮城県図書館本）

武蔵なる広通といへる人の、をのがどちの歌をあつめて巻となしけるにそへたる序。

かの人のもとめによりてなり。その中に武家沙弥等なり。

それ笹竹の世にある空蟬の人のおもひをもはるけ、情をものぶるは此敷島のことはより近きはなし。こゝをもてみけ国しろしめすすべらみかどの御つくりをも葉つむすこにくだし、又は岡のべにうへたるかたい人も心ざしを富の小河のながれにとゞめしより、天ざかるひな、内日さすみやこをも言はず、そのしなくだれるもたかきも、あふなあふななぞへなく、心の泉時ををひてふかく、言葉の林日にそひてひろごれり。かゝれば、時雨ふりをけるならのはの古ことをばさらにもいはず、霞みの夕の水無瀬の宮にいたるまで代々にしるせるあと、そのわいためなきなるべし。しかるに世はみづかきのひさにへだ、り、扱はいそのかみふり行あまり、其さま家々にわかれ、其心人々にたがひて、昔のをきてにかなはざりしより、ひとり藤川のさゞれ、きればいよいよかたく、小倉の松あふげばいよいよ高きため

しを、あめがしたにとゞめて、此ながれと此風をつたひ、さるはまことにかたち柴ふる人よりもいやしく、詞うるまの島守よりもだみたとやいはむ。かるがゆへに、星をいたゞきて百の位にそなはり、嵐もきりて九重ねにさぶらふとも、からをすて、はしもつあがた遠つゝるなかの人々は、なにはのよしあしもしらず、まことに千尋の濱のかひなきたぐひにも侍らんかし。か、れば中つ頃にも種玉庵の翁、さては細河のぬしなどをきて、をさをさかしら指出て、世にきこふるなむすくなし。しかるに千年に一度すむ源をしめて、六十に六の国の風をおさめ給ひしより、鳥がなく関のひがし、空音をはかるわづらひもなく、花さく山のとかけ、はなてる駒のあとをたづね、春の柳のいとなみをさだめて、武蔵野の道ひろきをさとり、秋の霜のひかりをやはらげて、箱崎の動きなきためしをはじめ給ひしかば、あるとある人民のかまどに今をあふがざるはなく、をこせるとをこせる道、しづのをだ巻むかしにかへさざるはなし。中にも此事にたづさはるもの、あだちのまゆみ引傳へたる、もの、ふよりはじめて、苔の衣にやつせるともがらまで、あるは紅葉するかきのもとに詞のにしきをあらそひ、あるは雪つもる山のべに心の道をもとむ。それがさまをいふに、内野の露玉のうるひをはぢ、はこやの氷みがけるはたへに及ばずといふべし。かくて落ちれるくさぐさを書とゞめて世にもてさはぐは、まことにはいまのやどりあゆみをそくし、かんやの紙あたいを高うすといふなるべし。こ、に何がしれをとつで、やつがれに津国のみつとばかりの詞を心の杉のしるしくはふべきよし申けるに、草むらのむしのさせるふしなく、雲井の鳥のあとほかなきをば、いかにとゞむべきにもあらねど、つらつらおもひはかるに、いなび野のいなびんも人めかしおほして、淵の魚の沈みおもへるにもあらず、岸のうたかたうきたる心をかきいだせるは、まことに袖の古木のわれにくげにや侍らん。さらば瓦の窓繩の扉の外にいださで、やがてやりすてんこそ、とり所に侍らめといふことしかり。

鶏鳴而後開集 作者目録

源高門 中院家門人宗極 吾郡 松野國重 吾郡王
二宮今地家集之由抄集之由抄 法皇御之
人法名金栗園 其家密林道徳光和尚

大尊利春 冷泉家門人御側元巨勢氏 爲姓

平知清 武者小路家門人 大御者 権傳 吾郡
蘇秋園下草二冊之四ノ一 行 宗 實 卿 集
實 法 名 家 義 美 元 法 皇 御 内 々 以
由 中 院 家 爲 之 依 序 傳 之

美信守基秀 中院家門人御側小性 後言院 吉林 氏

③ 作者目録卷頭

高門 冷泉家門人 田家 泰任 吾郡 吉林 氏 御 冊
次 泉 家 門 人 法 國 明 加 友 雲 功 休

康珍 冷泉家門人 爲 御 側 守 基 松 野 長 隆 氏 御 冊
武者小路家門人 宗極 依 後 言 院 爲 御 冊 師

草菴 至 月 法 眼 三 英 實 文

吾寬 冷泉家門人 町人 海 光 宗 三 席 庄 門

源頼政 武者小路家門人 御 側 言 誦 誦 主 初
爲 元 家 門 人 爲 御 側 言 誦 誦 主 宗 實 氏 御 冊

藤原利恒 中院家門人 小 兼 房 長 井 御 冊 三 席 庄 門
爲 元 家 門 人 爲 御 側 言 誦 誦 主 宗 實 氏 御 冊

大僧那法珍 冷泉家門人 爲 御 側 言 誦 誦 主 宗 實 氏 御 冊

山城守高綱 敵山廻峯 千日 滿 行 者
大目 巧 木 源 性

都百三十四人 冷泉家門人 爲 御 側 言 誦 誦 主 宗 實 氏 御 冊
爲 元 家 門 人 爲 御 側 言 誦 誦 主 宗 實 氏 御 冊

④ 卷末